

第6章

アラムナイ・参加者 の実像

アラムナイ寄稿文…………… 146

数字で見る日米学生会議…………… 150

第6章 日米学生会議

「アラムナイ・参加者の実像」企画趣旨

第60回日米学生会議実行委員報告書担当
廣田隆介

本章は、主に二つのターゲットに向けて企画されました。第一に、日米学生会議を日々ご支援いただいている方々。そして第二に、これから日米学生会議に参加しようと考えている学生の方々へ向けてです。日米学生会議は社会から多大なご支援を受けながら継続されており、その期待に答えるための一つの方法として、日米学生会議アラムナイのご活躍をお伝えすることが適当と考えました。そのため「アラムナイ寄稿文」という項を設け、アカデミア、ベンチャー企業経営、NPO法人、国際協力関係など幅広いジャンルで社会に貢献している方々が、日米学生会議における経験をその後どのように仕事に活かされているかということをご報告書に寄稿していただきました。同時にこれらは、将来日米学生会議に参加を希望されている学生の皆様の道標ともなると期待しています。また、「数字で見る日米学生会議」という企画を立ち上げ、日米学生会議参加者のデータを数字で示すことで、「帰国女子会議」や、「理系は参加できない」などといったレッテルを取り払うことに注力しました。

本章をご覧になることで、様々な側面から日米学生会議に対する理解が深まり、日米学生会議をご支援いただいている方々、そして日米学生会議へのご応募を考えていらっしゃる方々の輪が広まれば幸いです。

アラムナイ寄稿文

第34回会議参加
井伊雅子

一橋大学の国際・公共政策大学院で経済学、特に医療経済の問題を中心に研究と教育に携わっています。

ICUの1年生の時にJASCに参加しました。高校時代に1年間カナダに留学した経験があり、将来は国際機関で働きたいという希望を持ちICUに入学しま

したが、それと同時にJASCに参加したことは、その後の人生に大きな影響がありました。私が参加したJASCは米国で開催され、初めてのワシントンDCやNY、デューク大学、ボストン郊外のWellesley Collegeでの滞在は、一つ一つの出来事が鮮明な思い出となっています。

分科会はbioethics（生命倫理）に参加しました。社会科学系の学生が選ぶ分野としては異質な感じもありましたが、社会現象の比較文化的な分析手法に関心があり、自殺の日米比較が私の報告テーマでした。分科会のリーダーは当時東大医学部6年生の赤林朗さん、参加者は東大医学部2年生の糸和彦さん、北大医学部の松浦淳さん、聖心女子大で美学を専攻していた赤津晴子さん、アメリカ側はYale大学のSusan Asmaningさん、Amherst大学のAndrew Infosinoさんでした。当時は、将来医療関係者と一緒に研究をするようになるとは思いませんでした。医療界との最初の出会いがJASCの分科会でした。

JASCを終えて、将来の進路を模索している時に、国際機関の中でも、世界銀行やIMFのような機関の方が働き甲斐があるのではないかと、そのためには経済学を専門とすること、などのアドバイスをくれたのもJASCの先輩でした。当時のICUの社会科学科では経済学の教員の数も少なく、科目としてもあまり充実していませんでした。慶応大学の経済学部在籍していたJASCの友人がICUの近くに住んでおり、しばしば訪ねてはいろいろ教えてもらいました。慶応大学の講義を聴きに三田キャンパスに行ったことも懐かしい思い出です。

ICUを卒業して、米国のウィスコンシン州立大学マディソン校の経済学部の博士課程に進学しました。国際機関で働くためには、欧米の一流大学で経済学の修士号、できれば博士号を取得することが必須と聞いていたからです。ウィスコンシン州立大学は経済学部では全米で10位前後の大学です。東海岸や西海岸の大学、中西部でもシカゴ大学などと比べると日本では知名度が低いのですが、州都のマディソンは全米でも住みやすい街に何度も選ばれたことのある美しい学園町です。安全で物価も安く、のんびりとした留学生活を送ることができました。

大学院の途中で、世界銀行の調査局で働きました。最初はサマーインターンとして夏休みだけと思っていましたが、結局2年間、研究員としてワシントンDCに滞在しました。当時世銀では研究体制が大きな変革期にありました。マクロ経済政策だけでなく、医療や福祉といったミクロの経済政策へも関心が移っていった時期です。当時構造調整政策の対象になっていたボリビアの貧困分析が私の世銀で与えられた仕事で、家計調査のデータを担当しました。ボリビアの医療制度改革に関係することになり、何度か現地を訪ねました。博士論文も途上国の医療制度改革をテーマにボリビアのデータを用いて執筆しました。

1995年に横浜国大の経済学部就職したのですが、日本に戻ると日本の医療制度の問題に徐々に関心が移りました。途上国で働く日本の制度についていろいろ聞かれることが多いのですが、あまり詳しく知らなくて残念に思ったこと、日本の医療制度も大きな問題をいろいろ抱えていることなどが理由です。

国際機関にいる時にもJASCの先輩、友人、共通の知人に会うことが多くありましたが、日本に戻り、医療政策にかかわりますと、JASC出身の医師、官僚、研究者と仕事上ばったり会うことが多くなりました。利害関係のない学生時代にこれだけ多くの分野の仲間と巡り合えたことは本当に恵まれたことです。

JASCの分科会の日本人参加者に限っても、赤林さんは生命倫理の研究者の第一人者となり東大教授として活躍され、糸さんも熊大医学部で専門の研究を続けながら、睡眠と時間という専門分野を一般向けの著書『時間の分子生物学』として出版し、講談社出版文化賞を受賞されています。赤津さんは聖心大学を卒業後、アメリカのメディカルスクール、インターンを経て、アメリカで臨床と研究に携わり、その体験記を出版されて医学部の関係者に広く読まれています。学術会議の会長を務められた黒川清元東大医学部教授は海外経験も豊富で、小泉元総理のアドバイザーも務められた方ですが、赤林さんや糸さんは東大時代の教え子であり、アメリカで活躍す

る赤津さんもよく御存じで、私たちが学生時代からの知り合いだと知って、「日本の通常の学生の人間関係では考えられない！」と驚いていました。単なる同級生とか同窓生というのではなくて1ヵ月間のJASC、その前の数ヵ月の準備期間と文字通り寝食を共にした人間関係は確かに通常の学生生活では得られないものです。

さて、現在アジアの医療制度に関する書籍を執筆・編集しています。今年JASCに参加した学生さんたちがお手伝いをしてくれています。彼女たちのJASCの経験談を聞きながら、私も経験したJASCの思い出を昨日のように思い出しています。あの濃密な夏の1ヵ月は二度と経験することはできないのかと思うと、これからの参加者の方々に羨ましく思います。

第39回会議参加
ヴィジョネア株式会社 内古閑 宏

私は2000年にヴィジョネア株式会社を設立しました。私が起業をしたのは、日本の技術者に光を当て、技術と市場の橋渡しを行い世の中に新しい価値を提供したい、と思ったからです。設立の理念は「日本発世界初の技術で新しい産業を創る」です。

ヴィジョネアは技術開発ベンチャーであり、映像メディアの技術を開発して事業にする、ということに現在は注力しています。映像メディアであるDVDとインターネットの連動。複数のデジタルメディアを連動させることによって単独のメディアでは実現できなかった新しい提案をしています。映像を楽しむ時に「DVDを買う」、「DVDを借りる」という形でいまは商品を手に入れています。しかしこれはVHSというアナログメディア時代からの続いている購入スタイルです。もっと何か新しいスタイルがあってもいいのではないかと。それによって市場がもっと広がっていくのではないかと。ヴィジョネアはDVDとインターネットを連動することによって消費者に商品購入法の第三の選択肢、「PPV（ペーパービュー）DVD」を提唱しました。DVDの映像がレンタル価格で視聴できる、でも商品を返却せずに

第6章 日米学生会議

手元に残しておけるという購入方法がPPV-DVDです。次世代DVDのブルーレイ・ディスク(BD)でも同様な開発を行っています。独自技術を基に映像商品の新たな購入スタイルを世に提唱する、ということにチャレンジしています。

このようなヴィジヨネアでの活動は、遡るとJASC(日米学生会議)での経験が起点になっていることが多いです。JASCの経験で得た視点が、その後の学生生活、社会人生活で培われていったのだと思います。一つ目は、国、という視点でものごとを考えられるようになったということ。日米、という2ヵ国を意識した会議を通じて日本と世界、という観点でものごとを考えるようになりました。世界に通用する日本人技術者のレベル、そこから生まれた技術を用いて新ビジネスを創造し世界に貢献する。そのために技術者が生き生きと働いて技術を世に出せる場を創っていきたい、と考えたことです。二つ目は、人と違った、自分らしい人生を歩んでいく、という視点を持たれたことです。JASCに参加して、米国で教育を受けてみたいという思いが益々強くなり、就職後私はハーバード・ビジネス・スクールへ留学することになりました。そこでは一回限りの人生を独自の考えを持って歩むことの大切さ、面白さを強く感じました。一度の人生であるならば新しいビジネスを創造することによって世の中を変えてみたい、という価値観が醸成されました。三つ目は、チームでことを成し遂げる意義、です。一人でできることは限られている、チームを結成することにより、達成できることも違う、達成感も違う。JASCでは日米のチームに、個性豊かなメンバーが揃っていました。個性のダイバーシティから生まれる議論、発想。ビジネススクールの教室においても、たくさんの個性を集め企業のケーススタディを徹底的にしていました。あらゆる視点から考察した上で事業を進める、可能な限りのオプションを考えた上で方向性を選ぶ、ことの重要性を学びました。ヴィジヨネア社での採用は、可能な限り異なる個性を集めることを心掛けています。

本原稿を書きながらJASCに参加した当時の純粋で前向きな気持ちを思い出しました。思い出しながら、

当時の自分には負けていけないぞ、まだまだ成長するぞ、と邁進するパワーが湧いてきます。いまの私にとって「JASCでの経験」は、そのような存在です。

「あの夏の記憶」

第54回会議参加、第55回会議実行委員長
乗竹亮治

あの夏の沖縄もとめどなく暑く、僕らをうだらせていた。あの夏も、オリンピックセンターのアスファルトは、灼けつく日差しを照り返していた。あの夏の原爆忌も、蝉しぐれの中、黙祷を捧げる日米両学生の額には、汗がにじんでいた。

「真剣に語り合う夏があってもいいと思う」というキャッチコピーをまとった実施要綱を配り歩き、70名近い仲間と、泣き笑ったあの夏から、はや5年が経とうとしている。

日米学生会議に想いを馳せるとき、その記憶が細やかなディテールまで鮮明であることに、時として驚く。2003年の夏、沖縄の空は台風に覆われ、一晩を停電のなか過ごすこととなった。深夜、宿舎が用意したガス式のランタンを持つとうとすると、熱せられた取っ手に触れた人差し指に痛みが走った。火傷の痛みが、鈍く尾を引いた。ロウソクやランタンの灯で、夜更けまで語り合い、心の底から笑い合った記憶。沖縄の現地学生、日本側参加者、アメリカ側参加者の間で、なかなか埋まらない歴史感覚の溝ともどかしさ。降り止まない雨。そして右手人差し指の痛み。このまざまざと思い出させる皮膚感覚こそが、日米学生会議の思い出であるように思う。

日本側実行委員長として参画した第55回日米学生会議のテーマは、「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～ U.S. and Japan: Civic Participation in a Globalizing Society」だった。学生同士が国家論やイデオロギーなど大きな物語を語り合うことも重要だが、同時に、教科書的な議論に陥ることなく、今、学生として、一市民として何が実現可能なのかを議論すべきであるという我々なりの模索だった。

この模索の延長線上に現職があるかもしれない。現在、「日本医療政策機構」というシンクタンクで勤務しているが、市民主体の医療政策の実現をミッションとするノンプロフィットの組織である。海外の財団や組織、国内の組織と連携取りながら、国内外における医療政策提言活動を行っている。

我々が実現しようとしているミッションは、まさに日米学生会議で語り合ったテーマと重なり合うところも多いが、直接の決め手となったのは、日米学生会議の若手OBが、何人もこの組織の立ち上げ時期に参画していたことだった。非営利法人に新卒で就職することは一般的にも、日本ではまだ珍しいことだと思う。いささかの不安ももちろんあったが、日米学生会議の若手OBがワールドクラスで認められる組織を作ろうとしている姿は、不安を上回る安心感と期待感を持たせてくれた。

日米学生会議での経験は、終わることなく今に引き継がれている。海外組織や財団との連携の任に当たったことも多いが、お会いした方がアメリカ側OBであったり、JASC, Incのボードメンバーであった例もある。人脈に限らず、プロジェクトの収支を議論し、外部と折衝し、そして70名近い学生を引率してきた経験は、有形無形に今に活かされている。今年の夏、スイスのジュネーブで国際学会があり、患者市民リーダーを引率し通訳したことがあった。そんなときもふと、5年前の夏を懐かしく思う。

現役の学生さんに依頼されたとはいえ、錚々たる諸先輩方を差し置いて、このように筆を取ることは憚られた。身の程知らぬ放言であることを自認するところだが、日米学生会議の参加者に、幅広い職業選択の可能性を示す意味で、あえて現職のことを書かせていただいた。

森鷗外「舞姫」の冒頭付近にこんな記述がある。

「5年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、穉(をさな)き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常(よの

つね)の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげにするしゝを、心ある人はいかにか見けむ。」

2003年の蒸し返すような暑い夏から、5年が経とうとしている。右手の指に火傷の跡は見当たらないが、あの夏の記憶は僕の心に今も焦げ付いている。

日米学生会議一終わらない、夢を見られる場所

第57回会議参加、第58回会議実行委員
波多野綾子

本稿では、日米学生会議を卒業した駆け出しの社会人として、日米学生会議での経験が仕事や人生の進路を選ぶ際にどう影響し、また現在の生活の中でどう生きているのか、といったことをお伝えできればと思います。とはいえ、他にもより経験豊かご先輩方、友人たちがいる中で、拙稿がお役にたてるのかわかりませんが、結局日米学生会議の経験やそこから学んだもの、その活かし方は一人一人違うので、数多くの参加者それぞれが抱く「日米学生会議」の中に、こんな経験・想いも存在するのだな、という気持ちで読んでいただければと思います。

さて、簡単に自己紹介をしますと、私は57回(2005年、日本開催)に参加者として、また58回(2006年、アメリカ開催)に実行委員として日米学生会議に関わりました。大学卒業後、米系投資銀行を経て、現在は官庁で国際協力の仕事をしています。

人生の進路選択として重要な就職先を選ぶにあたっての日米学生会議の影響は決して少なくありませんでした。何より、日米学生会議の実行委員としての活動期間が、就職活動にまるかぶりしていたことで影響せざるをえませんでした(笑)。時間や精神的にけして楽ではありませんでしたが、今はあの時日米学生会議があったから今の自分がある、きっとやらなかったら一生どこかで後悔していただろうと思えます。

まず、現在の仕事を選んだ理由のひとつに、日米の尊敬できる仲間たちとの交流と協働を通して、また様々な分野で活躍する先輩方を拝見して、グローバルな環境で自分を磨きより成長したいという思いが育っていったことがあるでしょう。

第6章 日米学生会議

さらに、自分は人一人一人がその可能性や能力を最大限に発揮できるような社会と平和の実現に少しでも役に立てるような生き方がしたいと思っていましたが(それがJASCに参加し、また実行委員となった理由の一つでもあったのですが)、その目的は民間の会社ではなかなか達成されないと思いこんでいました。しかし実際に多くの公共心を持ったJASCの先達が企業でも自分を磨き、自由な発想で社会変革を起こしているのを目の辺りにし、またCSRをテーマにしたシンポジウムの開催(58回では、社会責任投資の会社を起業した井上氏、現タリーズコーヒーインターナショナル会長松田公太氏などを招いてシンポジウムを行いました)などを通して、公務員や政治家だけでなく、どのような分野にも志を持った人々が存在し、よりよい商品、会社、仕組み、社会を作るために日々奮闘しているということを実感しました。どのような立場にあっても、志とあきらめられない力、そしてここ日米学生会議で出会えたような素晴らしい同士さえいればやりたいことが実現できてしまうのではないかと、それを現実と思わせてくれる仲間との出会いがここにありました。大事なものは、どこで働くかではなく、どうありたいのか、誰と、何をを目指したいのか。異なる価値観やバックグラウンドを持った仲間との出会いは、より広く長期的な眼で人生を見渡す力をくれたと思います。

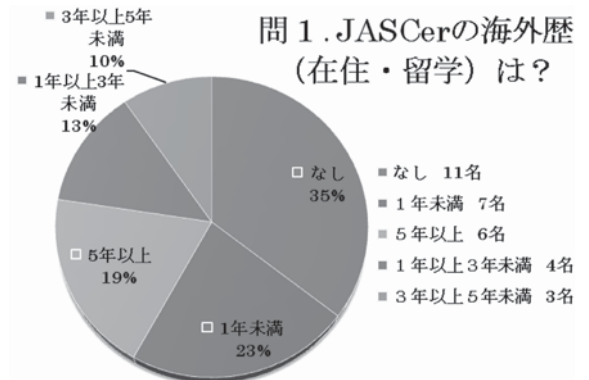
そのように就職という人生の選択においても大きくインパクトのあった日米学生会議ですが、私は社会人になった今、一層その有難さを実感しています。もちろんJASCで培った人とのコミュニケーションや協働の経験は実務でも役に立っていますが、より感じるのは学生という社会的「肩書き」の無い身分で出会った友人たちが、「会社」というベールを取り去ったありのままの自分に忌憚りの無い意見をしてくれる貴重な仲間であるということです。また、何度も徹夜で議論をして、笑って、泣いて、日米学生会議という場を創り上げるため不器用なほど一生懸命に日々を駆け抜けた仲間たちは、今でも、盛り上がりたとき、落ち込んだとき、人生に迷ったとき、真剣に話を聞いてくれ、そして一方でどこまでも馬鹿な企画も、突拍子もない考えも現実に出来てしま

う、他には無い「場」となっています。1年経っても2年経っても、きっと10年後も、このかけがえのない絆とともに、いつか見た夢は終わらずに続いていくのだと、そう思います。

最後になりましたが、本年度も素晴らしい会議を共に創り上げた60回日米学生会議の皆に祝辞を、それを支援して下さった賛助者・団体の方々、またこの場をくれた実行委員の皆様にご心より感謝を申し上げます。

数字で見る日米学生会議

これまでの募集広告やの報告書ではあまりJASCer自体の特性を把握できない。ゆえにそれを数値やグラフ化することにより、これからJASCへの応募を考えている方々に本当のJASCerの特性を知っていただきたく思い、第60回会議参加者にアンケートを実施した。また、学年や専攻データに関しては過去5年間に遡って検証を加えた。本項が今後JASCへの応募を考える方々の一助となれば、本項の目的は達成されたと言えるだろう。

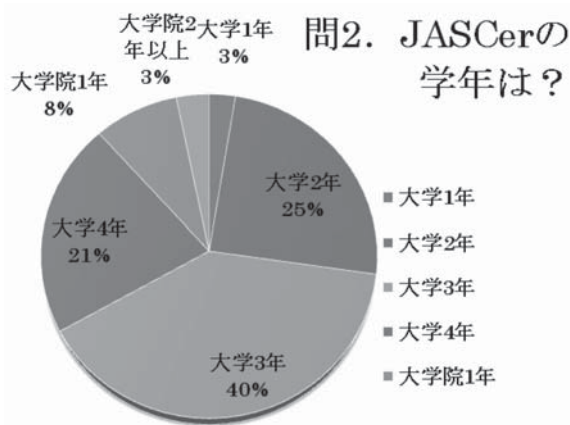


第60回日米学生会議参加者36人のデータを基に作成

問1.

本来JASCとは、日米学生会議と言われるように、日米間の交流を趣としたプログラムであり、基本的に高い英語能力が問われると考えられがちである。しかし、参加者の実態はどうか。アンケートで最も多いのが「海外経験なし」という予想に反する結果だった。1年未満まで合わせると実に半分の参

加者が海外に長期滞在した経験に乏しいのだ。実際に、英語力が会議の全てを左右する訳では無い。本会議では英語の堪能な参加者に適宜通訳をお願いし、またSlow down, Translation, Clarify, Wrap it up, Louder, などの独特のサインが参加者のコミュニケーションを助けている。勿論海外に長期滞在していた経験を持つ者も多いが、JASCを海外経験の足掛かりにしている者も少なく無いのである。

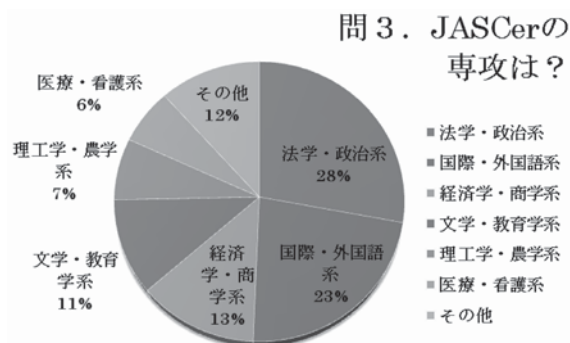


過去5年間の参加者148人のデータを基に作成

問2.

データを見ると高学年の割合が多いように見えるが、1、2年生の割合も1/4程度とかなりの割合で参加している。上級生の専門的知識や広い視野、下級生の発想力やエネルギーが上手い具合にバランスが取れており、本会議に活力を与えているというのが率直な感想だ。また様々な年齢層の参加者がいることにより、各々が自分の役割を意識し、お互いを高め合うことができる。アカデミックだけでなく人間的にも成長できる場だと言える。

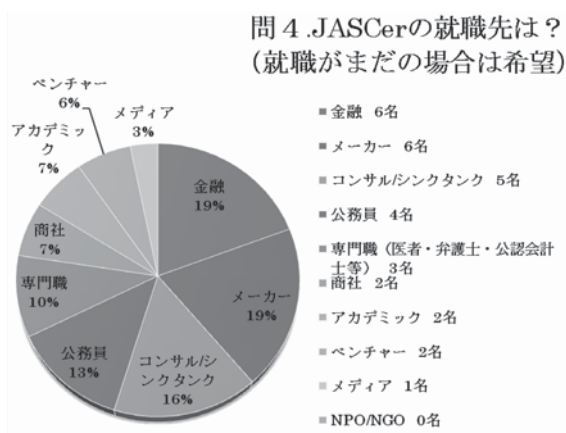
さらには、JASCでは学年や年齢に関係無く参加者同士フランクに付き合う習慣があり、全員がタメ口で会話をする。言葉による距離感が無くなること、更に1ヵ月という長い本会議期間を通して、参加者同士の絆は一気に深まるのだ。



過去5年間の参加者148人のデータを基に作成

問3.

JASC参加者の割合は圧倒的に文系が多い。国際交流が主に文系学生によって担われていることと共に、分科会のテーマが文系寄りであったり、また議論において抽象的な事柄を議論することが多いことも一因であると思われる。しかし、その他の分野の参加者が活躍できないのかというと、そのようなことは全くない。逆に理系のように、数値やデータを使って議論を展開するのも会議の中では必要となってくる。またそうした現実的、科学的視点が、文系中心の参加者の議論の中で力を発揮し、議論に革命を起こしてくれることもある。それゆえ日米学生会議では毎年、理系学生にも広く参加を呼びかけている。



第60回日米学生会議参加者36人のデータを基に作成

第6章 日米学生会議

問4.

60回参加者の就職先や就職希望先のデータである。これを見ると、外資系を含む金融やコンサル、総合商社やメーカーが圧倒的に多い。どれも国際的に活躍する場が多い業界である。日米学生会議は日本という国を相対的に見られる機会でもあるので、国際的な視点の獲得に繋がるのだろう。そしてその高い能力をいかんなく発揮する場所に就職していると言える。また、公務員と言っても外務省を目指す者も多く、様々な分野で国際的であるといえる。しかしそんな中ながら、起業やベンチャーを目指すユニークな者も存在する。自分の専攻に閉じこもって

いてはなかなか出会えない刺激的な仲間と出会えることは、その後の進路にも大きな影響を及ぼしているのだろう。

こうした多岐に渡る就職先において、先輩方は多大な功績を残している。そしてJASCでの繋がりが、ビジネスや研究上役に立ったと聞くことも少なく無い。先人の偉業を乗り越えて、私たちも数年後に社会で活躍できる人材になり、社会に貢献していく。それが日米学生会議の目指す社会貢献の一つの形でもあるのだろう。

(文責：伊藤昂介 廣田隆介)